

平成元年生まれ、富山県富山市出身。20代宗家宝生和英に師事。平成23年東京藝術大学音楽学部邦楽科卒業。平成24年「清経」ツレにて初舞台を踏み、平成29年「田村」で初シテを勤める。



葛野りさ
かどの

1988年 神奈川県生まれ、叔父の宝生流能楽師 田崎隆三に師事。2011年 東京藝術大学音楽学部邦楽科を卒業し、20代宗家宝生和英の内弟子に入る。同年「金札」で初シテ。2018年内弟子を終え職分となる。富士宮にて「羽衣教室」を主宰。九段にて「幸宝会」を主宰。



田崎 甫
はじめ

出演者

二〇一八年七月二三日(月)

臥牛サロン 第一回

能花月の物語

プロデュース 田崎 甫

(宝生流能楽師)

於 臥牛敷舞台

富士宮市粟倉南町一三二

舞台当主 高橋千洋

(富士宮市中央町在住)

運営 たのじ合同会社(富士市青島町)

臥牛サロン

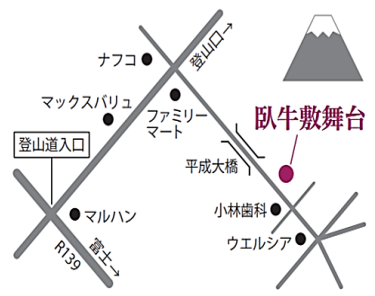
8月20日(月) 18:30～能「羽衣」の物語
9月17日(月) 18:30～能「経政」の物語
※9月は日にちが一日繰り上がりました。(旧:9/18)

お稽古：羽衣教室 [臥牛敷舞台]

7月30日(月) 13:30～
8月 6日(月) 13:30～ (個人レッスン、謡・仕舞)
8月20日(月) 15:00～
※見学歓迎

臥牛敷舞台

富士宮市粟倉南町132
臨時駐車場：裏手に隣接の空き地



ホームページ：
田崎甫「能への一步」
<http://www.noh-ippo.jp>



田崎甫「羽衣教室」「臥牛サロン」お問合せ先

☎ 0545-38-9939 (たざき)

Fax 0545-67-5588

メール：hajime-noh-ippo@outlook.jp

運営：たのじ合同会社(代表 田崎玄吾)
〒417-0047 静岡県富士市青島町195番地の3
グレース富士603号

進行・シテ 田崎 甫

地謡 葛野りさ
かどの

一 ワキ名乗り・ご挨拶

二 仕舞一「花月」クセ

「ビデオ・説明・仕舞

三 仕舞二「花月」キリ

「ビデオ・説明・仕舞

四 サロンタイム

「花月」

場所 京都清水寺の境内。花盛りの春
シテ 花月(禅寺で修行する半俗半僧の美少年、
喝食「かつしき」、芸に秀でていた)
ワキ 旅の僧(花月の父、出家して全国を巡り
子を探す)
アイ 門前の男(狂言方)

（筑紫国彦山の麓の僧が登場する。）

「風に任かせる浮雲の様なこの身は、泊まる当てもなく何処までさ迷うのであるう。」

「俗にあった頃、一人子が七歳の春行方不明になってしまった。これを出家の縁と思ってこの様な姿になり、諸国を廻り修行をしている。」

（僧は清水寺の境内で、渴食の達人な芸を見る。）

花月クセ

そもそもこの寺は、坂上田村麻呂が大同二年の春に創建されて以来、今に至るまで音羽山の峰の木々の下枝から滴る水滴を集めて、濁ることのない清らかな水が流れているが、その水のような清水寺の観音の絶える

ことのない恵みを享受していない人はいない。ある時、この音羽の滝の水が五色に見えて落ちて来たので、このことを怪しんで山に入り水源を訪ねたら、こんじゅ山の岩の洞の中に水の流れあって、名前こそ青柳だがもう朽ち果てた柳の木が沈んでいた。その木から光が射して素晴らしい薫りが四方に漂ったので、

「さては疑いもなく」
楊柳観音の変化した姿であられるかと、人々は皆手を合わせ、さらに観音の化現であることを示す不可思議な靈験を示してほしいとお願いすれば、朽ち果てた柳に緑がよみがえり、桜はもとより桜ではない柳の老木にまで白い花が咲き乱れた。その故実によって千手観音の衆生済度の誓願の有難さは、枯れ木に花を咲かせるほどだと、今の世までも言い伝えられている。

（僧は、渴食を花月と思い名乗りである。問答の末、父と知った花月は喜び、天狗に拐われた後の出来事を父に話す。）

花月キリ

さて、私が彦山に登った七歳のとき、天狗に攫われて連れて行かれた山々のことを思い出すのも悲しいことだ
（羯鼓の舞で、天狗に拐われた後の経緯を語る）

まず筑紫の国には彦山、そしてまた思い出深い大野山四王寺、讃岐の国では松山、雪の積もった白峰、さて伯耆の國には大山、丹後と丹波の境にある鬼が城山と聞けば、天狗よりも恐ろしい。さてまた、京に近い山々には愛宕の山の太郎坊、比良野の峰の次郎坊、有名な比叡山の大岳だけれど、少し心が和むのは澄んだ

月夜に横川の流れが見えたことだ。日頃は遠くから眺めるだけで登ることなど出来ないと思っていた葛城山、高間の山、大峰山の山上が岳、釈迦が岳や富士の高嶺に登り、雲や霧の中で寝起きすることもあった。このように天狗に攫われて夢うつつのような気持ちで諸国の山々を巡っているうちに、心が乱れ狂い、この籠をさらさら、さらさらと摺っては歌い、舞っては拍子をとって歌い、山々や峰々、里々を巡り巡ってついに、この僧にお逢い出来たのは嬉しいことだ。これからは、この籠をさつと捨てて、この上はあのお僧に連れ立って仏道修行に出立することになります。皆さま、お名残惜しいことです。

（父と花月は、一緒に仏道の修行に旅立つ。）